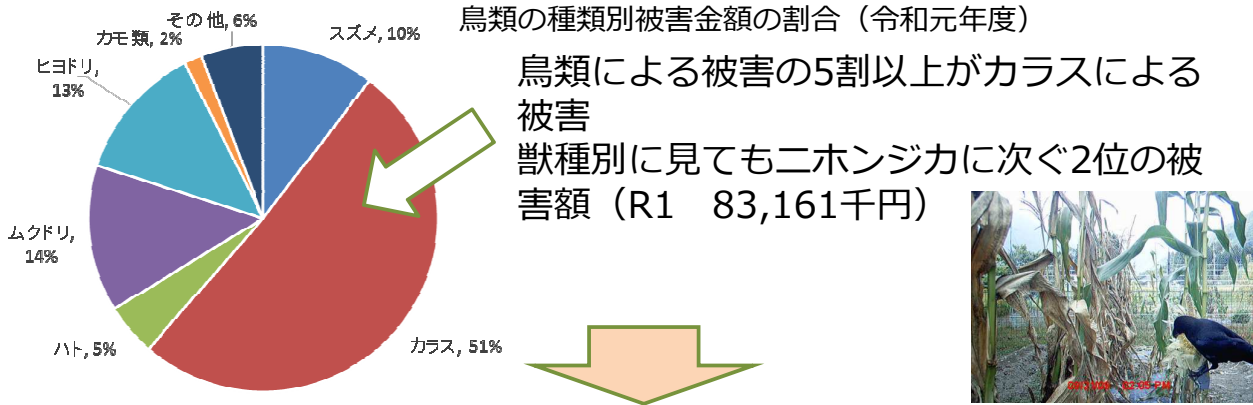


カラスによる被害

県内全域に生息し、果実や野菜を中心とした農業被害を中心に、ごみを荒らす、糞を落とすといった生活被害、家畜飼料をあさる畜産被害といった様々な被害を出している。



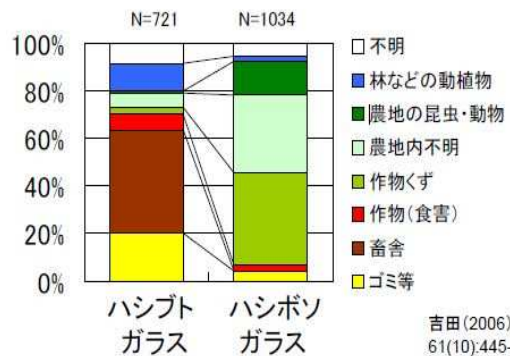
カラス被害を減らすためには、行動範囲や生息実態をつかみ、時には市町村を超えた地域全体で対策に取り組み、「えさ場」を提供しない地域づくりを進めることが必要

なぜ増えているのか

- ・ 自然の環境の中であれば、餌が少ない冬場に弱い個体は自然淘汰される。
- ・ しかし、生活圏内にある農地の廃果、家畜の餌や堆肥、墓地の供物、ゴミ等を餌として、本来淘汰されるはずの個体も生き延びることが、数を増やす要因の一つと考えられる。



農地に集まるカラス



吉田(2006)農業技術 61(10):445-449

カラスの餌

対策は？

生活圏内の餌を減らすこと→生き延びる個体数の減に効果的

カラスはどこから来るのか 何を食べて生きているのか

- ・カラスは集団ねぐら、餌場を行き来し20~30kmの行動圏で生活している。
- ・県内のカラスの行動や集団ねぐらの位置を調査したデータは1983年以降更新されていない。

まずは何をすべき？

ねぐらの場所、餌場、行動範囲を調査しマッピング
→餌場となる環境を解消するため、行動圏内の関係者に
“自分事”として理解してもらい、取組に参加してもらう。

廃果等、動物の餌になるものを除去することは、他の動物の
出没抑制にも有効

今後の取組

令和2年度

生息状況調査を長野市を中心とした地域で実施

●農業者へのヒアリング

行動範囲の確認では、既往の被害情報が重要である。ヒアリングをはじめアンケート調査等により、農業者、JA、猟友会などから幅広く被害状況の情報を収集整理

●行動範囲調査

カラスの「ねぐら」や「採食地」などの場の利用特性に着目し、既存データやヒアリング等により把握した被害情報を元に、調査地区を2地区程度選定、地区内のカラスの利用状況、行動範囲について現地調査を実施

令和3年度以降

生息状況調査で把握された行動範囲、生息特性等を市町村、関係団体等の関係者で共有し、地域ごとに点検
一体的に必要な対策を実施することにより、カラスによる被害の軽減、適正な生息密度の管理を促進